

大豆栽培情報（8月号）

令和8年7月31日
福岡大城農業協同組合
南筑後・久留米普及指導センター

1 生育状況（7月15日現在）

今年度の播種は、梅雨明けが平年より早かったこともあり、7月11～12日頃を中心に行われました。

また後述しますが、昨年度に引き続き今年度もカメムシ類（ミナミアオカメムシ等）の多発が懸念されています。今年度も必ず適期の防除徹底をよろしくお願いいたします。

2 中耕・培土

中耕・培土の実施により土の通気性を良くし、根の発達を促すことは、地上部の発育と倒伏防止に有効です。雑草防除や畦間かん水にも役立つ重要な作業です。第1回目は本葉2～3葉期、第2回目は本葉4～5葉期ころに実施します。ただし、ほ場の乾燥が続く場合、中耕・培土すると乾燥が促進されるため、無理をせず、降雨を待って実施してください。

また、培土後の溝は、明渠や排水溝に連結させて表面排水の向上に努めましょう。

!!注意!! 開花期以降の中耕は、根を切断しやすく、生育抑制や落花につながるため、開花始め（平年8/20頃）以降の中耕作業は避けましょう。

3 雑草防除

高温乾燥が続き、雑草の発生も早く、多くなっています。前回6月の大豆栽培情報掲載の体系防除図を参考に、防除します。今後の散布剤は、以下を参考に選定してください。

使用時期	薬剤名	使用時期	備考
アサガオ等の広葉雑草が多いほ場	大豆バサグラン液剤	大豆2葉期～開花前 (雑草の生育初期～6葉期) ただし収穫45日前まで 使用回数：1回	アサガオ類：2～3葉期まで 【注意①】ツル化したアサガオ類には効果落ちる 【注意②】気温が高い日中の散布は大豆への薬害を助長する
イネ科雑草が多いほ場	ポルトフロアブル	雑草生育期 (イネ科雑草3～10葉期) ただし収穫30日前まで 使用回数：2回	中耕・培土後の散布で長期的に防除できる ※スズメノカタビラを除く ※隣接する水田への飛散に注意

4 乾燥対策

地下灌漑(フォアス)導入地区では施設を適切に活用し、土壌水分を適正管理しましょう。

導入のない地区では、水路の水位が暗渠の排出口より低い場合は暗渠栓を閉めたままに、逆に高い場合は暗渠栓を開けることで土壌の乾燥害を低減しましょう。

（裏面に続く）

5 ハスモンヨトウ対策

卵を葉の裏側に産みつけ、ふ化後2齢(1 cm以下)までは集団で生息し、白変葉を生じます。3齢以降(1～2.5 cm)は分散して食害し、5～6齢(老齢)の食害量が最大です。大豆が小さい時ほど、食害による影響が大きくなるため、初期防除は重要です。

①8月上旬頃の発生初期は、白変葉を見つけ次第、手で除去

②8月中下旬頃に発生が増加したら、薬剤防除

ポイント 初期の防除で発生量を抑え、9月の防除で実害を抑えます。

フェロモントラップの誘殺数を参考にする場合は、成虫誘殺ピークから10～14日後頃が防除適期です。(1回目の防除適期は後に発出する緊急情報でお知らせします。)

防除体系	薬剤名	散布濃度	散布液液/10a	使用回数	収穫前日数
液剤/乗用管理機	ノーモルト乳剤	2,000 倍	100L	2回以内	14 日前まで
無人航空機		8～16 倍	0.8L		

6 カメムシ類対策

今年度もカメムシ類(ミナミアオカメムシ等)の**多発**が懸念されます。

カメムシ類が多くなると、**青立ち株**発生リスクが上昇し、品質および収量が低下します。

今年度も必ず**適期の防除徹底**をよろしくお願いいたします。

◇カメムシの防除適期

1回目：開花**20**日後

2回目：開花**40**日後

病害虫対策(体系防除/液剤体系)

開花前

8月中～下旬

ハスモンヨトウ防除

若齢幼虫が群棲している
白変葉を見つけたら、除去

白変葉が増え始めたら
ノーモルト乳剤



白変葉



若齢幼虫

開花期

8月20～25日

開花20日後ごろ

9月中旬

3種混合防除
(紫斑病・加減類・ハスモンヨトウ)

紫斑病
トップジンM水和剤

カメムシ類
スタークル顆粒水溶剤

ハスモンヨトウ
グレースIA乳剤
または **プロフレアSC**

開花40日後ごろ

10月上旬

カメムシ類 防除2回目

カメムシ類
キラップフロアブル



イチリンゾウ カメムシ



ミナミアオカメムシ

※NOSAIと連携してフェロモントラップを設置しています。